

## 『成実論』について

講師 阿部 真也

『成実論』という論書の研究は、かつて中国において隆盛を極めたが、小乗の論であると論断されたことにより、衰退の一途をたどる。現存する資料は、漢訳のみであり、注釈等も全て散逸した。その内容の一端を論じることにする。

第1の発聚の最後の部分で仏教内の異説10種を挙げる。

①過去、未来の二世の有無については、過去・未来の存在を否定して有部の説に反対している。②一切法の有無については、ヴァイシェーシカ学派やサーンキア学派の実有説を否定し、十二処のみが有であるという独自の説を述べる。さらに、有無を超えた中道を説いている。③中有の有無については、存在しないとされている。④四諦の理解について、一時に理解する、と述べている。⑤阿羅漢の退不退について、不退を主張する。⑥心性は浄か不浄かについては、本論は本浄説を取っているように見えるが、浄不浄どちらも衆生に対する仏の教えである、ともいい、立場をはっきりしていないようにも見える。⑦使(随眠)は心と相応するか否かについて、相応する、としている。⑧過去の業の有無については、どのような場合にも無いとする。⑨仏・法・僧の三宝の内、僧宝の中に仏宝が含まれるか否かについては「含まれない」とする。⑩我の有無について、五

蘊の和合するものを仮に我とするのみで、実有ではないとする。以上、十の問題について論じて自らの立場を明らかにしようとしているが、必ずしも一定しているわけではない。

『成実論』は様々な法について網羅的に論じている。この中から、特に色と四大についての論議について見ていく。色蘊は次のように定義される。「色蘊とは四大と四大種所造色である」これは、ニカーヤ・阿舎に出てくる定義を踏襲したものである。この定義は有部のアピダルマ文献にも受け継がれているが、有部においては、付け加えて、「五根五境の十色処と無表色」という定義も示される。これはかなり初期に段階において見られる。『俱舍論』に至ると、後者の定義のみが示されるようになる。

色の定義において最も重要である四大種について見ることにする。『成実論』では四大種を仮に施設されたものであるとする点、実有であるとする有部と大きく異なっている。四大を具体的な物質として扱っていて、堅等の性質とする説を認めていない。また、四大は色香味触によって構成される、とする。

有部では、四大から色が生じると説くが、『成実論』では四大からではなく色は業や煩惱などから生じるのである、としている。また、堅相は地を生じる因であるとして、別なものとしている。そして、四大について、仮名の因縁の中に仮名の名字がある、として、あくまで仮に施設された

ものであることを主張する。五境との関係については、色香味触によって四大が成り立っているという。『俱舍論』等では、四大によって五根・五境が成り立つとしていて、全く異なる説となっている。

すなわち、『成実論』においては、四大種は具体的な物質を指すとして、有部の性質を指す説は否定される。そして、あくまで色香味触が集まって仮設されたものとして扱っている。まず色香味触があり、次に四大種、そして、五根の順に成り立つとしている。

『成実論』に出てくる説は、仏教以前からの四大種説の延長上にあると言える。また、業や煩惱を色の生じる原因として、その内容は世俗的・具体的なものになっている。サーンキヤ派など外道のために四大種を説く、という記述があるのもその理由の一つかもしれない。有部によって、四大種をその性質とする説が成立したが、阿含以来の、具体的な物質を指す説も無くなることはなかったと言える。その一面が、『成実論』に出ている。その理由としては、他学派との関係、また、業や煩惱との関連があったとも考えられる。